

中学校における「キャリア・パスポート」の記述を 学習成果として位置づけるための評価ルーブリック設計

Design of an Evaluation Rubric for Positioning Junior High School Students' Career Passport
Writing as Learning Outcomes

小田 佳世子*¹ 久保田 真一郎*¹ 合田 美子*¹ 川越 明日香*¹

Kayoko ODA*¹ Shin-Ichiro KUBOTA*¹ Yoshiko GODA*¹ Asuka KAWAGOE*¹

熊本大学*¹

Kumamoto University*¹

＜あらまし＞ 本研究は、中学校での「キャリア・パスポート」の記述を、生徒のキャリア教育における内省の質を示す学習成果のエビデンスとして位置づけ、教員がその記述を見取り、指導改善につなげるための評価の在り方を明らかにすることを目的とする。最終的には、評価ルーブリックを活用した教員研修の設計・実践を含む段階的研究として構想しているが、本発表ではその前段階として、記述の現状分析と評価ルーブリックの設計について報告する。

＜キーワード＞ キャリア・パスポート、ルーブリック評価、キャリア教育、教員研修

1. はじめに

今日の社会は、急速な技術革新やグローバル化の進展により、職業選択やキャリア形成の在り方が大きく変化しており、個人が自己の適性や学びを振り返り、主体的にキャリアを形成する能力の重要性が高まっている。こうした背景を受け、文部科学省は2020年度より、小・中・高等学校を通じたキャリア教育の充実を目的として「キャリア・パスポート」を導入した。「キャリア・パスポート」は、児童生徒が自己の学びや活動を継続的に記録・振り返るポートフォリオとして位置づけられているが、具体的な指導法や活用方法は学校や教員に委ねられており、形式的な記入にとどまる実態が指摘されている(久保田, 2024)。特に、教員間で意義の理解が十分に共有されていないことや、生徒の記述が感想的・定型的になりやすいこと、キャリア教育の基礎的・汎用的能力と記述内容との対応が不明確であることが、活用を難しくしている要因と考えられる。また、導入からの年数が浅く、実践知が十分に蓄積されていないことから、より効果的な活用方法の検証が求められている(森永, 2024)。

本研究では、こうした課題に対し、記述の現状分析を通して評価の観点や段階を明確化する必要があるとの立場から検討を行う。

2. 研究の目的

本研究の目的は、中学校における「キャリア・パスポート」の記述を学習成果のエビデンスとして位置づけ、教員が生徒の内省の質を見取り、指導改善につなげるための評価枠組みを明らかにすることである。最終的には、「キャリア・パスポート」を評価ルーブリックで見取ったものを活用し、教員研修の設計・実践までを含む段階的研究として構想しているが、本発表ではその前段階として、中学校におけるキャリア・パスポート記述の現状分析と、その結果に基づく評価ルーブリックの設計について報告する。

3. 研究方法

A 中学校における行事前後の「キャリア・パスポート」の記述を対象に、記述内容の特徴を質的に分析した。その分析結果を踏まえ、生徒のキャリア発達の表れを段階的に見取るための評価ルーブリックを設計した。なお、本研究は評価ルーブリックを活用した教員研修の設計へと発展させることを想定した段階的研究であり、本発表ではその基礎となる分析およびルーブリック評価に焦点を当てる。

3.1 現状分析

「キャリア・パスポート」の活用状況を把握するため、生徒の記述内容の分析および教員へのインタビューを行った。その結果、以

下の課題が明らかとなった。

- ・活動内容の列挙や「がんばりたい」「成長したい」といった抽象的な感想、「優勝したい」といった結果のみを示す表現が多く、具体的な行動や課題、理由との結びつきが弱い。
- ・各生徒の記述の質には大きな差がみられ、段階的な変化や成長として見取ることが難しい。
- ・毎年同様の行事について記述するため、前年度と変化のない記述がみられる。
- ・一文で記述している生徒が多く、その背後にある思考や意図を教員が読み取ることが困難である。

以上のことから、「キャリア・パスポート」の記述を生徒の内省や課題意識がどの程度具体化しているかという観点から、段階的に整理し、評価可能な枠組みとして示す必要性が明らかとなった。

3.2 評価ルーブリック

現状分析の結果を踏まえ、本研究では、キャリア教育で育成が求められる基礎的・汎用的能力と「キャリア・パスポート」の記述内容とを照らし合わせることを軸として、内省の質と行動へのつながりに基づく4段階の評価ルーブリックを作成した。評価ルーブリックの設計にあたっては、まず現状分析により明らかとなった生徒記述の特徴および教員の見取りの困難点を整理した。その上で、コルプの経験学習モデルにおける「具体的経験—内省的観察—抽象的概念化—能動的実験」という学習循環を参照し、生徒の記述における内省の深まりと、次の行動への展望の程度を段階化した。

本ルーブリックは、理論的枠組みと実際の記述データとの対応関係に基づく理論的妥当性をもつ枠組みとして設計した。評価の信頼性や教育的効果については、今後、教員研修を通じた実践の中で検証する予定である。本稿では、体育祭の行事前記述を対象としたルーブリックを表1に示す。

表1 行事前（体育祭）キャリア・パスポート記述ルーブリック

レベル	資質・能力の到達像（課題対応能力 × 自己理解・自己管理能力）	記述例（体育祭での目標）
Lv1	行事を自身の課題や行動として意識していない	「体育祭をがんばりたい」
Lv2	自身の行動を意識しているが、理由や課題との結びつきが弱い	「体育祭で自分の競技を一生懸命やる」

	結びつきが弱い	
Lv3	自身の課題を踏まえて目標を設定している	「緊張で失敗しやすいので、体育祭では落ち着いて行動することを目標にした」
Lv4	課題を分析し、達成のための方略や意図をもっている	「クラスの足を引っ張らないために、事前に練習し、自分から声を出すことを目標にした」

※ 行事後の記述についても、別途ルーブリックを作成している。

3.3 考察・今後の課題

本研究により、中学校における「キャリア・パスポート」の記述には、事実や感想の列挙にとどまるものから、経験に対する意味づけ、さらに次の行動や課題意識へとつながるものまで、質的な違いが存在することが明らかとなった。これらの違いは、単なる記述量の差ではなく、生徒が自身の経験をどのように捉え、言語化しているかという内省の質の差として捉えることができる。

本研究で設計した評価ルーブリックは、こうした記述の質的な違いを段階的に可視化する枠組みを提示した点に意義がある。従来、「キャリア・パスポート」の記述は印象的な判断に依存しがちであったが、本ルーブリックを用いることで、教員が生徒の記述を基礎的・汎用的能力の観点から共通理解のもとで見取ることが可能になると考えられる。

今後は、本ルーブリックを教員研修において活用し、教員の見取りや問いかげがどのように変化するのかを検討するとともに、評価の信頼性や教育的効果についても、実践を通じて継続的に検証していくことが課題である。

参考文献

久保田愛子 (2024) 高校教員のキャリア・パスポートの受け止め方に関するパイロット的検討. 宇都宮大学共同教育学部研究紀要. 74.

森永武人 (2024) 生徒のキャリア形成を前提とした特別活動の果たす役割に関する研究—キャリア・パスポートの汎用性および今後の更なる活用に向けて—. 日本私学教育研究所紀要. 60. 99-102.

文部科学省 (2019.3.29) 「キャリア・パスポート」例示資料について https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/career/detail/1419917.htm (参照日 2025.9.1)